

# 芹沢文学読書会

案内通信

No. 179

2026年4月20日(月)

(令和8年)

## 4月便り

桜の花が咲き、各地で花見が行われました。今年は物価高で、家庭で料理した弁当で我慢するのが多かったようです。

アメリカとイスラエルの突然のイラン攻撃で、石油がホルムズ海峡で封鎖されて、世界各国で大騒動です。休戦してパキスタンでの交渉が決裂しています。ガソリンの高騰だけでなく、石油製品も不足するので様々なものが値上げされようとしています。日本は石油の備蓄があり、自動車のガソリン代補助もあって、当分は心配無く過ごせています。一番の心配は、イスラエルのネタニヤフの戦闘欲とアメリカのトランプの非常識です。国際法無視の戦争はロシアのプーチンと共に、止めてくれ!!……

初夏の良い季節になりました。どうぞ、お元気に読書会にお出掛け下さい。

松林庵主人  
爽やかに  
春の陽射しに  
柿若葉……

## 第179回・芹沢文学読書会



①日時: **5月17日(日)** 午前10時～12時 [\*特別に第3日曜日午前です]

②会場: **大分県立図書館 研修室 No.1** [\*特別に研修室No.1です]

③内容: [I] 芹沢文学に関する話題や情報 10:00～10:10 am 自由に話す。

[II] **芹沢文学読書会** 10:10～12:00 am 』♪♪♪

○テキスト 新潮文庫『結婚』芹沢光治良作(1995年7月10日新潮社発行)

157～199頁 「第六章」 「終章」 \* 読んで来て下さい。

☆ 読書会では部分的に読んで語ります。質問にも答えます。

◇父と母が離婚することになり、年子は津田を家に連れて来て、離婚届に署名して、信州へ父と新子を見送ります。母を連れて姉の家に連れて行き、津田と一緒に鎌倉へ。年子は妊娠して、津田との新しい家での幸福な生活が始まりました…。

昭和22年10月から23年10月に雑誌<婦人倶楽部>に連載され、

昭和23年12月30日 大日本雄弁会講談社から『結婚』として発行された。

=次回は、7月12日(第2日曜日)午前の予定です。=

◎同封資料; 随筆「弔辞 八月二十日」日本ペン倶楽部副会長 **芹沢光治良** 昭和40年10月1日発行の雑誌<文芸>10月号(河出書房新社発行) 158～159頁に掲載された作家高見順氏の弔辞。

\*この雑誌は、河出書房新社の文芸誌である。「谷崎潤一郎・高見順 追悼特集」に、日本ペン倶楽部で専務理事となって交流した高見順氏が死去したので、その弔辞として書いたものが掲載されていたので拡大コピー(×1.15)して同封資料とした。一読下さい。[同封資料提供者・中村輝子]

## 芹沢文学・大分友の会



連絡先: 〒872-1651 大分県国東市国東町浜 4765(番地) 小串信正方

☎ 0978(77)0565 郵便振替口座 01970-5-16072/芹沢文学・大分友の会

☆ 第 178 回・芹沢文学読書会の報告 於 大分県立図書館・研修室No.5 』♪♪♪

第 178 回の芹沢文学読書会が、3 月 8 日(日)に大分県立図書館の研修室No.5 で行われました。常連の参加者で、新潮文庫の長編小説『結婚』をテキストにして、あらかじめ読める人は、「第四章」「第五章」を読んで来ることにしました。父を入院させ、新潟に帰り、思い詰めて自殺した弟太一でしたが、この病院の医師津田と交際した年子は求婚されました。年子は津田に毎日のように恋文を書きました。婚約して、4 月 17 日に大神宮で結婚式をし、大松閣で披露した。逗子の海岸の淋しい旅館に新婚旅行し、「あの人と二人海辺にならんで、ほうようし、大自然の前で、二人が一人になる幸福を感謝した。」二人は鎌倉に行き、歓待されました。住む家が無く、実家の二階の二部屋に住み、新しい家を探した。父が買った千葉の田舎の家を新子が嫌い、小諸の家を買って住むこととなります。母は行く所が無く、畳に顔を伏せて啜りあげています…。

今回は、その続きの「第六章」「終章」について語ります。読書会へお出掛け下さい。

○令和 7(2025)年度の年会費が未納の方に納入をお願いします。 ☺ ➔ ☆ ☆

\*振替の年会費納入の確認が出来なくなっているため、同封の年会費入金報告用紙に、入金月日・金額・氏名を書いて、同封の封筒(切手は貼っています)に入れて、御面倒ですが返送して下さい。 寄付も受入れますが、無理をされないように。芹沢文学研究会の会員の方で、芹沢文学・大分友の会にも入会いただいている方々にも会員の継続をお願いいたします。

【芹沢文学案内 No.123】 芹沢文学の仏訳長編小説

芹沢光治良は、戦後に創作を始め、世田谷区の借家にて、多くの作品を著作しました。戦中から結核闘病を自伝的に書き続けた『孤絶』『離愁』を戦後に『故国』を書き継ぎ、三部作とした。戦中に書き上げていた長編小説『懺悔紀』を養徳社から出版した。



芹沢文学の仏訳作品『アイダ夫人』『サムライの末裔』『パリに死す』

昭和 25 年春に、日本ペンクラブ広島大会に参加し被爆地を直接に見て、原爆の悲惨さを実感しました。昭和 26 年にスイスのローザンヌで開催された世界ペン大会に日本ペンの代表として 5 月末から渡欧しました。大会後にローザンの結核療養所を再訪し、帰路に 7 月から 4 ヶ月間パリに滞在しました。学友や友人知人を訪ねて再会し、作家になったことを知らせました。学友から、作品を読みたいと仏訳をロベール・ラフォン社に紹介してくれました。仏訳者があれば出版しても良いとのことで、当時パリに留学していた哲学者森有正がアルバイトでやってもと了解し、仏訳出版契約を結びます。社のアルマン・ピエラールが監修し、徹底した改訳で 1953(昭和 28)年 9 月 8 日に『パリに死す』が出版され、多くの新聞で評価され多くの人々に愛読され、商業的にも成功しました。ラフォン社から次作が求められて、前年の 10 月から雑誌<婦人公論>に連載した『一つの世界—またはサムライの末裔—』を二作目に選んだ。青木和子仏訳・ピエラール監修で、1955(昭和 30)年 5 月 20 日に『サムライの末裔』の題で出版されました。広島原爆がリアルに創作されていて、大変な評判となる。第三作として『パリ夫人』が小野吉郎仏訳・ピエラール監修で、1958(昭和 33)年 10 月 6 日に『アイダ夫人』の題で出版されました。これらの仏訳にフランス詩人連盟からフランス友好国際大賞が授与された。実は、この後に第四作『愛と死の陰に』小野吉郎仏訳が完成したが、何故かラフォン社から出版されませんでした。今後出版したいものです。⑩

日本ペン倶楽部専務理事高見順君の霊前に捧ぐ。  
高見さん、貴方が日本ペン倶楽部の専務理事に就任したのは国際大会を東京に開催した後の、じみ  
活動しかできない困難な時でした。

想えばあれから長い間、ペン倶楽部にも、警職法改正反対問題、バスターナーク事件、ケストラー問  
題お厄介なことが多くご苦労をなさったが、その間、貴方はペン倶楽部を楽しいものにしようと心を砕  
いていろいろな企画をたて、常に会員に喜ばれたが、又諸外国の文学者との交流と海外からの賓客の接  
待とに、細かな心を使われ、諸外国の作家にも喜ばれた。それにも拘わらず、貴方はいつもご自分の努  
力が足りないかと、不安そうに理事会でみんなにわびていられた。貴方は東南アジアの作家に多くの友  
を持ってられるが、三年前私はロシアとフランスで貴方の消息を熱心に訊く作家に幾人にもあって貴  
方の友がヨーロッパ大陸に多いことを知った。その時、いつか貴方と築地で一夜をとともに語ったフラン  
スの大戯曲家アシャル君が、もう一度東京かパリで、貴方と語りたいたくなつたがそれがそれも不  
可能になった。

貴方が入院なさる前の月の理事会のあと一緒に帰ろうと、八階の事務所からおりるエレベーターのな  
かで、貴方ははてれた様子で私に囁かれた、「貴方が今していると同じ仕事を、自分もこれから他人の生活  
をかりてしようとしています」と。あの囁きには貴方らしい私への励ましと『激流』からはじまって、  
昭和時代を書くこととする貴方の決意が響いていた。

去る三月三十日に、貴方は病床にあって一時間も、生の問題、信仰の問題、仕事のことを熱心に語ら  
れたが、私は貴方とはじめての出合いのような激しい感動を受けた。貴方は病床にあって他人をかりて  
『激流』を書きつづけることの困難から一先ずご自分の体験した昭和時代を、じかに残そうとして、あ  
の素晴らしい日記を整理し発表をなさったのではなからうか、そして健康になって激流を書きつづけるこ  
とを希いその書き終るまで生命をかって欲しいと、何かに祈られているようにお見受けした。

貴方は戦後二回、厄介な病気にかかり、それを克服して、その度に、作家として新しい境地を拓か  
れたので、今回も必ず再起して念願の大作を完成できるものと、自他ともに信じておったのに、ああ。  
貴方の『いやな感じ』のフランス訳の完成を私は一日千秋の思いで待った。貴方は「あの下品な俗語  
がどんなフランス語に変わるかしら」と病床でてれながら話していたが、ついにそのフランス本の出版を  
待たずに貴方は逝かれた。しかし『いやな感じ』のフランス本は、貴方のヨーロッパの友や諸国のペン  
の倶楽部の仲間のなかに、長く生きつづけることであろう。願わくば、在天の霊よ安かれ。

八月二十日

日本ペン倶楽部副会長

芹沢光治良

案内通信

No. 179

2026年4月20日(月)

(令和8年)

芹沢文学・大分友の会